

終末まで何してですか？

竹ヶ原 政 輝

奨励者紹介〔たけがはら・まさてる〕

日本キリスト教団高の原教会牧師

同志社大学神学部嘱託講師

そして、天使はわたしにこう言った。「これらの言葉は、信頼でき、また真実である。預言者たちの靈感の神、主が、その天使を送って、すぐにも起こるはずのことを、御自分の僕たちに示されたのである。見よ、わたしはすぐに来る。この書物の預言の言葉を守る者は、幸いである。」

わたしは、これらのことを聞き、また見たヨハネである。聞き、また見たとき、わたしは、このことを示してくれた天使の足もとにひれ伏して、拝もうとした。すると、天使はわたしに言った。「やめよ。わたしは、あなたや、あなたの兄弟である預言者たちや、この書物の言葉を守っている人たちと共に、仕える者である。神を礼拝せよ。」また、わたしにこう言った。「この書物の預言の言葉を、秘密にしておいてはいけない。時が迫っているからである。不正を行う者には、なお不正を行わせ、汚れた者は、なお汚れるままにしておけ。正しい者には、なお正しいことを行わせ、聖なる者は、なお聖なる者とならせよ。」

見よ、わたしはすぐに来る。わたしは、報いを携えて来て、それぞれの行いに応じて報いる。わたしはアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めてあり、終わりである。

命の木に対する権利を与えられ、門を通して都に入れるように、自分の衣を洗い清める者は幸いである。犬のような者、魔術を使う者、みだらなことをする者、人を殺す者、偶像を拝む者、すべて偽りを好み、また行う者は都の外にいる。

わたし、イエスは使いを遣わし、諸教会のために以上のことをあなたがたに証した。わたしは、ダビデのひこばえ、その一族、輝く明けの明星である。」`霊、と花嫁とが言う。「来てください。」これを聞く者も言うがよい、「来てください」と。渇いている者は来るがよい。命の水が欲しい者は、価なしに飲むがよい。

この書物の預言の言葉を聞くすべての者に、わたしは証しする。これに付け加える者があれば、神はこの書物に書いてある災いをその者に加えられる。また、この預言の書の言葉から何か取り去る者があれば、神は、この書物に書いてある命の木と聖なる都から、その者が受ける分を取り除かれる。

以上すべてを証しする方が、言われる。「然り、わたしはすぐに来る。」アーメン、主イエスよ、来てください。

主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように。

(ヨハネの黙示録 22章6—21節)

エスカトロジーって何？

つい昨日のことなのですが、小学生の娘が「エスカトロジーって何？」と聞いてきました。あるゲームアプリに登場するキャラクターの名前なんだそうですが、きつとご存知の方もおられると思います。ところで、その「エスカトロジー」とはどういう意味かはお存知でしょうか。そのゲームの中にすでに答えもあるわけですが、これは「終末論」のことです。「終末論」というのは、『広辞苑（第六版）』（新村出編 岩波書店 2008年）によりますと「世界や人間の終末を論ずるキリスト教神学の一部」という説明がなされています。最近、この「終末」という言葉をよく目にするなという気がして、こんなお話も、ある意味タイムリーなのかなと、新約聖書の「ヨハネの黙示録」という文書を今日は取り上げてみることにしました。

「終末」をよく目にするというのは先ほどのようなゲームの他、マンガやアニメのタイトルなんかでのことで、今日の奨励題もあるライトノベルのタイトルからとりました。「終末」というのは、「世界の終わり」を意味する言葉ですが、このフレーズもバンドの名前に使われていたりするわけで、最近はいろんなところで「終末」に対する関心が高いのかなと思ってしまいます。それも比較的若い世代の人向けのものにそれらの言葉がよく見られるように思うんですが、その感覚が全般的な外れではないとすると、その背景には何があるのかというのが少々気になるところです。ともかく今日は「ヨハネの黙示録」からキリスト教の「終末論」というものについて少しお話ししてみたいと思います。

教会は世界の滅びを願っている？

聖書は、旧約の「創世記」から見ていきますと、世界の始まりにあたる「天地創造」の記事に始まって、「ヨハネの黙示録」にある世界の終わりである「終末」に関する記事で終わります。今日はその聖書の最後の部分をお読みしました。聖書は、世界に〈始まり〉と〈終わり〉があると言っています。その〈終わり〉について、使徒ヨハネが見せられた幻を記すという形で「黙示録」は語りますが、その〈始まり〉と〈終わり〉を支配しておられるのが神とキリストであると言います。13節の「わたしはアルファであり、オメガである」とはそういうことです。ギリシア語のアルファベットの最初と最後の文字を使って、神こそがすべての初めであり、終わりであると言います。これは、すなわち神が世界の歴史を支配しているということを言っています。

この世界の終わりというのがすぐに来る、明日にも来ると、この文書が書かれた当時は信じられていました。今から2000年ほど前のことです。それから2000年、まだ世界の終わりは来ていないわけですが、教会はいつかその日が来るのだと信じて待ち続けています。それは復活後、天に昇って行かれたというイエスが再び地上に帰って来られる日とされます。このイエスの帰還を〈再臨〉と言うわけですが、この時に今の世界は終わるとされます。そのキリストの再臨の日について語る「ヨハネの黙示録」を読む時、そこから受け取られるのは往々にして〈滅びのヴィジョン〉です。世界が崩壊していく様が半ば異様な仕方で描かれます。それでは、教会は世界の滅びを願っているのかと言うと単純にそうとは言えません。この世界は、私達の目に見えているものは過ぎ去っていくものだということ、そして、それはすべてを支配しておられる神の御心の中で行われるものだということであり、世界の終わりはむしろ「神の国の完成」であると語られます。この教えを昔の人が信じ、そしてすぐにも来ると期待し、さらには「来てください」と真剣に祈ることができたのは、当時の教会が迫害の下にあったということが大きく影響しているでしょう。不条理とも思

われる苦しみを受ける中で、しかし、信仰を捨ててはいけない、必ず希望はあると信徒を励ます言葉が、この「ヨハネの黙示録」という文書でもあります。

それにしても、こんな苦しみとそれをもたらす悪の満ちた世界はさっさと滅んでしまえばいいという形で世界の終わりを待つというのは、正しい姿勢ではありません。聖書を通して示される「終末」の教えは、〈この世界を諦めない〉ということを教えていると私は思います。黙示録は、古い世界が終わって新しい世界が来ると言いますが、じゃあ今の世界を壊せば、すぐにも新しい世界が来るんだと考えたりするのは、「終末」の教えを誤解していると言えるでしょう。よく「破壊が創造を生む」などと言ったりしますが、創造のために破壊をもたらそう、新世界の到来のためにこの破壊は必要なのだ、そんなことを思う人が現れないとも限りませんから、注意が必要だと思います。事実、過去に起こった悲しい出来事の背後に、そういった発想があったのではないかとも思うところもありますが、いずれにしても聖書が語る「終末」というのは、神がその日を定めておられるというのが前提なのであって、それを人間が生み出してよいということはありません。

終末まで何してますか？

教会とは全く関係の無いところで、最近「終末」という言葉をやたら耳にするのは、なぜなのでしょう。将来への不安から、いつそ世界が終わってしまってもいいというような「終末」への期待感のようなものがあったりするのでしょうか。仮にそうだとすると、それは少なくとも聖書が語る終末を待つ態度とは違うものです。「ヨハネの黙示録」が語ろうとしていることをわずかな言葉で言い表そうとするなら、今時流行らない言葉かもしれませんが、「希望と忍耐」です。希望をもって忍耐することを勧めます。見方を変えれば、希望があるから忍耐できるということもあります。その希望がイエス・キリストとその父なる神にあるというのが教会の信仰です。自分たちを包む現実が闇の世界のようであっても、必ず夜明けは来る。明けの明星が輝く時が来ると、ヨハネは示されました。そのヨハネが語った究極の夜明けである「世界の終わり」を見据えることで困難の中を生き抜いた人々がいました。その人たちによって受け継がれ、伝えられた希望の言葉が聖書の中にはたくさんあります。

「終末」という言葉が頻繁に聞かれる時代、その背景に何があるのか個人的に気になるところです。その「終末」という言葉に何を見ているのか。「終末」を語る「ヨハネの黙示録」には確かに〈破滅のヴィジョン〉が見られますが、その暗い側面だけが「終末」という言葉のもっている世界ではありません。苦しみの多い中にも、決してこの世界を諦めてはいけないという希望がそこにはあり、また、終末まで今日をどう生きるかという励ましを伴いつつの問いかけがあります。そのことが正しく受け止められることを願います。そして、終末の教えを含む聖書の言葉が、かつて迫害の下にある人々を支えたように、今の皆さんにとっても今日と明日を生きる支えとなることを願っています。